

知的財産翻訳ジャーナル

NIP TA

2014年5月号

NPO日本知的財産翻訳協会機関誌

他言語と互換性が取れる日本語であれば翻訳品質は高まる

日本は高齢化と少子化を迎え、国内市場は既に「成熟・衰退期」に入っている。企業が「持続的発展」を目指すなら世界の市場を開拓するしかない。市場が見込める国への特許出願は増えていく。そこで無駄な特許出願は見なおされ、特許は「量」から「質」へ転換される。それは“世界で通用（戦える、武器となる）する特許明細書が求められることを意味する。

例えば日本から米国へ出願されている米国特許明細書は、記述内容に不明確なものが多く権利の主張が明確にできるのか心配である。なぜ不明確なのか、その原因の元となる要素は「日本特許出願明細書」から直接、英語へ翻訳され「米国特許出願明細書」が仕立てられていることにある。勿論、特許に関する考え方や権利の主張の仕方が、米国と日本では異なるという事実が払われていない部分もあるが。

“翻訳者は非論理的でかつ必要要素の記述が欠けている原文（日本語文章）からでも、できるだけ論理的に整合のとれた英語文章に仕立て上げるのも仕事の一つ”という意見も聞く。単なる下請け仕事に満足しているだけでなく翻訳者として、できるだけ品質の高い生産物を提供しようとしてされているその姿勢には敬意を表したい。しかし、翻訳という作業において、記述されている内容を、翻訳者が勝手に修正して転換することは、翻訳という本質からみて、許されることではないと考える。原文の日本語文章が意味不明であれば、どんなに良心的な、仕事への責任感の強い、また高い外国語能力を誇る翻訳者でも外国語に翻訳することは困難であろう。翻訳者に翻訳能力が無いのではなく、翻訳が難しい日本

NIP TA 理事
日本アイアール株式会社
代表取締役 矢間 伸次

語文章であるという事実を依頼者と受託者は共有すべきである。

日本特許明細書を英語や中国語に翻訳する際、翻訳者が技術を熟知した「名人」であれば、分かり難い日本語文章を頭の中で分解整理して、意味を損なわないで欧米や中国で通じる文章へ仕立ててくれる。名人の頭の中で優れた「日・日」の転換作業が行われていることになる。このような名人がたくさんいれば問題は無いのだが、残念なことに「名人」と称される高度技能者は圧倒的に不足している。海外出願件数が途方も無く多い現状では他言語へ転換できる日本語で書くしか解決方法は無い。それは機械翻訳ソフトの支援が受けられる、即ち文化の色合いをなるべく排除した文明言語である。それは第2母語として日本人が持つべき世界へ伝える「文明日本語」のことである。

言語能力の高い日本人が主張している、あるいは描写されている事柄が、読んでスイスイと頭に入る明快な日本語文書を書くことは難しいことではない。日本語は論理的に厳密に記述するには適さない言語であるという事実も無視できないが、日本語で論理的に記述できないということではない。言語の弱点を認識してそれを克服していく努力がなされてこなかっただけである。

NIP TA は名人の技を顕在化し、この技を広めることでグローバルに活躍ができる翻訳者の底上げを目指していると理解している。翻訳者は単なる翻訳作業員ではない。世界へ「物・事・考え」を誤解なく伝え、国益を守る責任がある。それはとても遣り甲斐のある仕事であると思う。（矢間伸次）